

10年ぶりに、入院をした。

渡航先のシンガポールで、全治3ヶ月の大怪我を負ってしまったのである。

20年近く前、大雨の日に螺旋階段から落ちて、左足首粉碎骨折というやはり大怪我をしたのだが、それで不自由になった左足をかばうため、長年がんばってきた右足側が、力尽きたようにポキンと折れた。

海外にいたので、帰国するのがまずたいへんだった。

骨折ホヤホヤの激痛を抱え、無理やり飛行機に乗った。

羽田空港近くの病院に運ばれ、帰国の翌々日に、手術を受けた。

そこから、6週間。

入院・治療・リハビリの日々は、私のマインドにささやかな変化を起こした。

「もう一度、楽器を吹きたい」

そう思うようになったのである。

出版社から独立して4年目の2013年、初めて書き下ろしの執筆依頼を受けた私は、その仕事に集中するため、演奏活動から離れた。

ビッグバンドを聴くことから、ビッグバンドの人間関係からも距離を置き、本の取材と執筆に励んだ。大好きなビッグバンドと決別することで自分自身を追い込もうとした。



山口ミルコの

ライブ観察

昨日\*今日\*あした

イラストレーション: 竹嶋浩二

あれから6年半。

その間一度も古巣のバンドに顔を出さず、原稿を書く以外の用事でライブに行くこともやめていた私の、この心境の変化はなんなのだろう。

今回再び大怪我をしたことで、20

年前の骨折の時に車椅子を押してくれたバンドの友人たちのことや、音楽に救われたことや、を思い出したというのは、もちろんある。

けれども大きいと思えるのは「リハビリの毎日」だ。

なかなかいうことのきかない身体と痛みに向き合いながらのリハビリは、楽器の基礎練習とそっくりだったのだ。

リハビリをしながら、初めて楽器を持った時のことを、よく思い出した。

メトロノームを前に延々と、終わりの見えないロングトーン。安定して音をのばすことの難しさと、毎日毎日闘っていた、あの頃。

しかし結果、その何年かのちに、私は好きな曲を奏でられるようになったのではなかったか。

あの時の辛抱を、忘れてはいけなと思った。

退院して間もなく楽器ケースを開けると、かつて私の愛してやまなかった宝物が、鈍色の光を放っていた。

<つづく>

山口ミルコ▷ 学バン時代、某有名コンテスト審査員賞受賞。エッセイスト。著書に『毛のない生活』『毛のカ ロシア・ファーロードをゆく』『似合わない服』など。「婦人公論.jp」に最新作『バブル』掲載中。公式サイト「ミルコのミルは平和のмир」<http://yamaguchimiruko.tanomitai-z.com>

KOBEjazz.jp

KOBEjazz.jpのコラム、山口ミルコの「ジャズひと観察」としても連載中。

好評既刊 『ミルコの出版グルグル講義』山口ミルコ 著 河出書房新社